

仮定表現に関する日中対照研究：機能拡張および文法化の観点を中心として

李, 慧

<https://hdl.handle.net/2324/7329395>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 李 慧

論 文 名 : 假定表現に関する日中対照研究
—機能拡張および文法化の観点を中心として—

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

20世紀初頭より「假定関係を表す表現」(以下、「假定表現」と略す)に関する研究が、日本語、中国語それぞれについて行われ、数多くの研究成果が蓄積されてきた。従来、假定条件については、日本語では条件文、中国語では因果文の下位分類として扱われており、両言語間やや齟齬があるように思われる。ただし、どちらの言語においても「假定関係を表す表現」であることは同様であるため、本研究では、「假定表現」という用語を使うことにした。具体的には、日本語では「ば」「たら」「なら」、中国語では“如果”“要是”“的话”を中心として、それらに関連する表現も取り上げることで両言語間の具体的な対照研究を試みた。本研究では、共時的および通時的の視座から両言語の「假定表現」の特徴と機能を確認し、両言語の「假定表現」の具体的対応関係について明らかにした。

本稿は全11章から構成され、第1章から第4章は本研究の序論、第5章から第10章は本論、第11章は結論である。

第1章では、本研究の背景、目的について述べた。日中両言語の假定表現の対照研究は手薄であるという問題意識を出発点とし、両言語における假定関係を表すそれぞれの接続表現の機能および使用範囲を分析し、それをもとに機能拡張における対称非対称、対応非対応を明らかにした。第2章では、本研究で援用した認知言語学および文法化に関する理論的背景を概観した。第3章では、先行研究を概観し、本研究の研究課題を明らかにした。まず、日中両言語の複文研究における本研究の研究対象たる「假定複文」の位置づけを確認した。日本語では、複文を分類する際に、形式、構造、意味という三つの観点から行われるのに対して、中国語では意味上からの分類しか見られなかった。それぞれの言語中における複文の分類を明らかにした結果、日本語の「順接・假定」条件文と中国語の「假定複文」とが対応関係を持つことが判明した。次に、これを前提として、両言語の假定表現に関する先行研究および対照研究に関する従来の研究を整理し、先行研究では十分な議論が行われていない点を明らかにした後、本研究の研究課題を提示した。第4章は本研究で利用したコーパスとデータ収集方法について説明した。

第5章以降が本論である。第5章～第7章では、日本語と中国語の假定表現の構文上・意味上の特徴を機能拡張の観点から明らかにした上で、両言語の假定表現の機能拡張について対照分析を行った。その後、第8章と第9章は文法化の観点から日中両言語における具体的な假定表現に注目して対照分析を行った。第10章では、これまでの結果に基づき、日本語と中国語の假定表

現の機能拡張と文法化の類似点と相違点についての考察を行った。

まず、第5章は日本語の仮定表現に関する章である。仮定表現の日本語複文における構造上の特徴を見た後、仮定表現「ば」「たら」「なら」の機能拡張とそのプロセスについて議論した。「ば」「たら」「なら」のような仮定関係を表す代表的な接続表現は、非仮定的用法からの発達と見なすことができるが、その過程で終助詞的機能、接続詞的機能が発達する様子を明らかにした。

第6章は中国語の仮定表現に関する章である。第5章の日本語仮定表現のまとめと同様に、仮定表現の中国語複文における構造上の特徴を見た。その後、中国語の仮定関係を表す接続表現に関する機能拡張では、非接続表現が接続関係を表すようになるプロセスをとることを確認した。これは日本語と異なる中国語の特徴であり、本研究では仮定表現の出現状況や文中の位置関係などの差異によって「仮定表現」「準仮定表現」「次仮定表現」の三種に類別した。

続く第7章では、第5章と第6章の結果に基づいて、両言語における仮定表現の共時的文法化の類似点と相違点を述べた。小柳(2018)の文法化と多機能化の議論に基づいて、日中両言語の仮定表現に関する機能拡張の異同を提示し、さらに、その点について両言語が非対応関係になっていることを明らかにした。

第5章、第6章、第7章の共時的観点を補い、第8章と第9章では通時的文法化の側面も加えながら仮定表現の異同を対照させた。具体的には、指示詞との関係(第8章)、助詞(提題助詞と終助詞)との関係(第9章)に焦点を当てて、両言語の仮定表現がどのような文法化のプロセスを辿っていったかについて述べた。

第8章は指示詞と仮定表現の融合形式の文法化についての考察である。まず、日本語と中国語における仮定表現の中に指示詞を含むものを抽出し分析した。日本語においては「そうしたら」「それなら」などの指示詞を含む接続表現が成り立つのに対して、中国語では接続機能と指示機能とを同時に備える準仮定表現“那”“那么”が存在している。さらに、具体的な標識、日本語「そうしたら」と中国語“那么”について対照することで、日本語「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”“那么”それぞれの間の差異を示した。日本語「そうしたら」には指示詞「そう」の性格が残っており、前文への意識が「そしたら」より強いことがわかった。その一方で、「そしたら」は「たら」の接続機能を強く残しており、前文と後文を接続する機能が強いことが明らかになった。即ち、「そしたら」については継起性が「そうしたら」より強いことを実証した。一方、中国語“那”と“那么”も相似の様相を呈する。“那”は指示性と接続性を備えるが、相対的に指示性が強い。これは“那”の指示対象たる前文を後文に持ち込むことで、前文の内容が焦点として表現されるためである。また“那么”は「そしたら」と類似しており、接続性が強いことが実際の例文から証拠づけられた。日本語と中国語の相違については、以下のように考えることができる。日本語では、「そうしたら」では指示機能と接続機能をいずれも完全に保持しているのに対して、「そしたら」では指示機能部分の「そ」が短縮化されているため相対的に指示機能が弱まり接続機能が強い表現となっていると考えられる。一方中国語では、“那”が指示機能と接続機能をもともと備えている上に、“那么”では“么”が加わることでさらに接続機能が

強化されることで接続性が強い表現になっていると考えられる。このように、日本語と中国語の文法化のプロセスの違いが、日本語と中国語の相違を生み出していると考えられる。

第9章は助詞と仮定表現の融合形式の文法化についての考察である。具体的に提題助詞と文末語気助詞(終助詞)にわけてそれぞれ見ていった。まず、仮定表現と提題助詞とが結合した日本語「(の)なら」と中国語“的话”について対照させた。話題提示機能と接続機能を兼ねる日本語「なら」と中国語“的话”それぞれの文法化プロセスを明確にした。そのうえで、「(の)なら」構文と“如果(说)……的话, ……”構文の対照を行った。結論として、「なら」構文と“如果……, ……”構文、「のなら」構文と“如果(说)……的话, ……”構文が対称関係をなすことが明らかになった。次に、仮定表現と文末助詞との連続性の部分については日本語「ば・たら」の終助詞的機能と中国語“就是(了)”について対照分析を行った。仮定表現と助詞との融合による文法化においてはもともと仮定表現で繋がれる複文が単文になっており、換言すれば日本語においても中国語においても単文化がその誘因の一つと考えられる。

第10章では、これまでの章で行った議論を踏まえ、日本語と中国語の仮定表現の機能拡張と文法化の類似点と相違点について統合的観点から考察を行った。日本語と中国語は異なる文法化の類型に属していると考えられるため、日本語においては形式の非仮定から仮定へ、中国語においては品詞分類の非接続から接続への拡がり成り立つわけであろう。また、異なる文法化の類型の両言語が似たような文法化プロセスを経ていることからみると、構文上の類似性がその誘因の一つと考えられる。さらに、融合がもう一つの誘因であるともみられた。融合を介して複文における仮定表現の機能が弱くなり、他の機能へ転じるとともに、もとの複文の形が崩れて脱文(節)化しているとも考えられる。

第11章では、本研究のまとめと今後の課題を述べた。第5～10章で考察した内容をまとめた上で、本研究の意義と今後の課題について述べた。